

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第8条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

| | |
|----------|--|
| ○氏名 | 田口 道昭（たぐち みちあき） |
| ○学位の種類 | 博士（文学） |
| ○授与番号 | 乙 第556号 |
| ○授与年月日 | 2017年12月15日 |
| ○学位授与の要件 | 本学学位規程第18条第2項 学位規則第4条第2項 |
| ○学位論文の題名 | 石川啄木論攷 青年・国家・自然主義 |
| ○審査委員 | （主査）瀧本 和成（立命館大学文学部教授） 中川 成美（立命館大学文学部特別任用教授） 太田 登（元天理大学文学部教授） |

<論文の内容の要旨>

本論文は、学位論文題名に示されているように石川啄木文学に関する研究を五部立てで総合的に分析、考察したものである。これまで石川啄木文学研究は、岩城之徳、近藤典彦、上田博、太田登らによって書誌、短歌、詩、評論、小説、随筆、日記など様々なジャンルで個別的に進められてきた。これら各々のジャンルを総合して考察する重要性を認識し、実践したのが本学名誉教授の上田博であるが、本論考は、そうした問題意識、先行研究の成果をさらに発展させ、同時代の文壇・社会を視野に入れながら韻文（詩歌）及び散文（小説、随筆・評論・書簡・日記）の有機的な関係性のなかで個々の作品を捉え直し、啄木文学を位置づけたものである。そのうえで新たな啄木像を提出することに努めており、それらが当論考の最大の特徴ともなっている。

論文構成（目次）は、以下の通りである。

序

第一部啄木と日本自然主義

第一章啄木と日本自然主義／第二章啄木・樗牛・自然主義／第三章「卓上一枝」論／第四章啄木と独歩／第五章「食ふべき詩」論／第六章啄木と岩野泡鳴／第七章近松秋江との交差／第八章「硝子窓」論／

第二部「時代閉塞の現状」論

第一章「時代閉塞の現状」を読む／第二章「時代閉塞の現状」まで／第三章〈必要〉をめぐって／第四章「時代閉塞の現状」の射程／第五章啄木における〈天皇制〉について

第三部啄木と同時代人

第一章啄木と与謝野晶子／第二章啄木・漱石・教養派／第三章啄木と徳富蘇峰／第四章啄

木と石橋湛山

第四部啄木像をめぐる

第一章中野重治の啄木論／第二章啄木と〈日本人〉／第三章「明日」という時間

第五部『一握の砂』から『呼子と口笛』へ

第一章『一握の砂』の構成／第二章啄木と朝鮮／第三章啄木と伊藤博文／第四章『呼子と口笛』へ

石川啄木略年譜・執筆評論・同時代文学年表

あとがき

索引(人名／事項／啄木作品)

(全 684 ページ)

第一部「啄木と日本自然主義」は、「時代閉塞の現状」執筆以前の評論を取り上げ、分析・考察し、自然主義文学隆盛期の〈実行と芸術〉論争に於ける啄木(文学)の位置づけを行っている。とくに啄木が田中王堂のプラグマティズム思想(哲学)を自然主義文学批判の根拠としながら、自然主義文学をはじめとする同時代作家たちとどのように切り結んで行ったのかが緻密かつ実証的に論じられている。同時に浪漫主義的色彩を帯びていた啄木が、どのように自己を批判し、他者の文学と対峙したかが綿密に検証されている。

第二部『「時代閉塞の現状」論』は、作品に詳細な註を付すと共に、この作品が執筆された同時代的文脈に於いて丁寧に分析・考察を加えている。時代の〈閉塞感〉の形成を詳細に分析し、その要因が単に文学界に留まらず、日露戦争前後の国内外の環境(状況)が要因としてあることを実証している。

第三部「啄木と同時代人」は、与謝野晶子、徳富蘇峰、石橋湛山、夏目漱石や教養派と呼ばれた人達との比較及び影響関係を考究することによって、啄木の文学と思想の位置づけを行っている。たとえば第一章は、日露戦争をどのように捉えたかを、与謝野晶子の詩「君死にたまふこと勿れ」を取り上げ、啄木と比較し二人の位相を明確に指摘している。また第二章では、「ネオ浪漫主義批判」を巡って啄木と漱石や漱石門下生との比較を通してその文芸観の共通点と相違点を明確に提示している。

第四部「啄木像をめぐる」では、文学史・思想史上に於ける啄木の位置や啄木像について論究している。中野重治の啄木論と国崎望久太郎の啄木論を中心に、戦前と戦後の啄木研究、あるいは啄木像の変遷を見定めている。啄木文学の受容の変遷に照明を当てることによって、作品研究・鑑賞に於ける多義的視点の必要性だけでなく、研究者(読者)側の啄木研究の在り方(場合によっては文学研究の在り方)を問う姿勢(態度)が、文学研究の今日的な問いかけと共に重要であることが示されている。

第五部『「一握の砂」から『呼子と口笛』へは、啄木の詩歌を分析・考察している。とくに第一歌集『一握の砂』にみられる〈他者〉の表現に着目し、啄木短歌に於ける〈他者〉表象がどのような意味を伴っているかを検討し、啄木の構成意識や短歌鑑賞に繋げている。また、詩集『呼子と口笛』に収録された詩の緻密な読解と成立事情、その構成意識についての分析を行い、〈二重生活〉と

いう啄木の問題意識のひとつの結論として位置づけている。

全体として、評論「時代閉塞の現状」をはじめとする啄木の自然主義文学批判を同時代の思想的・文学史的文脈の中に位置づけることを試みた論考である。また、啄木の自然主義文学批判の主要な根拠となった田中王堂をはじめとする明治のプラグマティズム思想(哲学)との関係性を実証し、そのうえで自然主義者以外の同時代文学者・思想家との交差についても考察したほか、啄木の思想や芸術観と関わって歌集『一握の砂』や詩集『呼子と口笛』など、啄木の代表的な韻文作品についての分析と考察を行い、相対的な視点を導入した評価と位置づけを行っている。

<論文審査の結果の要旨>

審査には主査瀧本和成、副査中川成美、副査太田登の3名が当たった。

本論文の成果は、まず第1に評論「時代閉塞の現状」を中心とする石川啄木の文学を、同時代の文学史・思想史の中に位置づけたことにある。とくに〈実行と芸術〉論争に於ける啄木の自然主義批判が、単純な統一という方向ではなく、〈意識しての二重生活〉という〈屈折〉を経て、歌集『一握の砂』や詩編『呼子と口笛』に結実して行く過程を検証できている点にある。

第2は、評論「時代閉塞の現状」に詳細な註釈を施し、同時代的文脈の中で読解を行ったことが特筆される。キーワードである〈時代閉塞の現状〉の形成や「必要」という概念の出典や作品上前提となっている〈青年〉の問題点等を緻密に分析・考察した点にある。とくに「必要」という概念が田中王堂とクロボトキンの思想との結節点になっていることが実証された。

第3は、啄木の同時代人である与謝野晶子、夏目漱石やその門下生、徳富蘇峰、石橋湛山らの文学観や思想と対比することによって、啄木文学を相対化し、文学史的な流れの中で位置づけたということ。

第4に歌集『一握の砂』とその周辺に関する論考として、韓国併合に関する歌、伊藤博文に関連する歌を取り上げその背景を明らかにすると同時に、歌集との関係や位置づけを行ったこと。さらに啄木晩年の作品『呼子と口笛』を伝記還元的な傾向のあった先行研究を批判し、作品中の表現と思想が織り成す詩作品であることを論証したことが挙げられる。

上述した通り、韻文と散文、抒情と思想を有機的に繋げながら作品を分析・考察したことにより、作品の立体的な解釈が実現できており、孰れもこれまでの先行研究に見られない広い視野と読解の緻密さ、それらと共に実証力を有した研究として結実している。

今後の研究としては、同時代の文学者たちとの比較に於いて同じ「明星」派、「スバル」派にいた与謝野鉄幹や森鷗外、北原白秋などの文学者(歌人・詩人)との比較や詩集『あこがれ』や歌集『悲しき玩具』の考察と位置づけなどが残された課題であろう。しかしながら、それらの課題点は聊かも論全体を損なうものではなく、本論考が創意に満ちた優れた博士論文として高い水準にあることは、審査委員の一致した意見であった。

以上、公開審査と論文審査の議論により、審査委員会は本論文が博士学位を授与するに相応しい水準に達しているという判断で一致した。

＜試験または学力確認の結果の要旨＞

本論文の公開審査は2017年7月27日(木)18時00分から20時00分まで、末川記念会館2階第2会議室にて行った。学位申請者による論文要旨の説明の後、審査委員は申請者に対する口頭試問を行った。公開審査の質疑応答を通して博士学位に相応しい能力を有することを確認した。

審査委員会は、本論文申請者の業績、経歴や学会での評価により、十分な専門知識と豊かな学識を有すること、また外国語文献の読解においても十分な力量を備えていることを確認した。したがって、本学学位規程第25条第1項によりこれに関わる試験の全部を免除した。

以上の点を総合的に判断して、審査委員会は申請者に対して、本学学位規程第18条第2項に基づいて、「博士(文学 立命館大学)」の学位を授与することが適当であると判断する。